

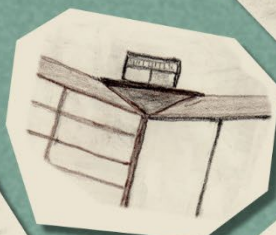
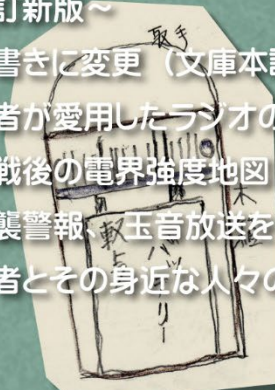
改訂新版

85年の田舎暮らしの日々を綴る

老人とラジオ

～改訂新版～

- 縦書きに変更（文庫本調）
- 筆者が愛用したラジオの写真
- 終戦後の電界強度地図（近畿）
- 空襲警報・玉音放送を詳しく解説
- 著者とその身近な人々の写真



西田武司

初版 2018年12月吉日
改訂新版 2024年6月20日

「空襲警報」

「ビィー」 警戒警報 中部軍情報 十四時四十分現在 敵の第一梯団二十二機は 高野山付近を経て 北に進んでおります ただ今時刻は一四時四十分半であります 以上」

「ビィー」 中部軍情報 敵梯団は 間もなく大阪に来るものと思われます 以上」

「うわわあっ・・・」

飛び起きた。ビックリした。一気に目が覚めた。

2015年8月15日(土) 早朝4時過ぎ。

鳴らせっぱなしにしている寝床ラジオから流れて来た「空襲警報」だった。NHK関西発ラジオ深夜便「明日への言葉」だ。

高野山、大阪、潮岬、神戸、田辺、和歌山、熊野灘と馴染みの地名が次々と流れてくる。

戦後世代の私(編集者)にとって初めて聴く本物。正直とても興奮した。頭に「空襲警報」と言わなかったのが不思議だった。「防空情報」「警戒警報」「空襲警報」と段階がある事を、後になって知った。

この放送を同じ時刻に、筆者武司も聴いていたらしい。筆者武司(父)とは確執があり、ずっと殺伐とした関係だが、この「空襲警報」の話題では珍しく盛り上がった。筆者武司と悦子(母)と三人で、酒を飲みながら、当時を回想して貰った

南方（おそらく南方へ向かう輸送船の中）で戦死した悦子の父。徴兵検査で、聴力に問題があり徴兵を逃れた筆者武司の父。広島砲兵で、「（広島原爆）伏せろ！」の号令により、九死に一生を得た叔父。

私が幼かった頃、大人から戦時中や戦後の話をよく聞かされた。日本を焼き尽くし、多くの日本人の命を奪った、憎むべき「ベイグン」に対して、なぜか？憎悪や悪口を口にする大人は誰もいなかった。米軍（ベイグン）Ⅱアメリカ軍という言葉が覚えたのもこの頃だった。物事の善悪も未だ解っていない私にとっては、ずっと不思議でならなかった。筆者武司なんぞは「大きなパイプをくわえて降りて来たマッカーサーは、とてもカッコ良かった」（ニュース映画で見たのだろう）とさえ言い切っていた。

幼い頃、台風はとても怖いものだった。当時の白黒テレビ受像機は、台風が来ると必ず「大阪管区気象台」が出て来て、やたら細かい経緯度線の天気図を映している。そして「室戸レーダーによりますと・・・」と、オドロオドロしたレントゲン写真のような気象レーダー画像が映し出されて来る。不気味の極み。震え上がる。

そこに、「米軍機が台風の目に突っ込みました」とアナウンサーは言う。

「エッ・・・??」「ベイグンキって敵機じゃないの?」「あんなこわい台風の目に突っ込むって、もしかして正義の味方??」

そうして一少年が抱いた謎は、日米安保闘争が収束する時代あたりまで謎のまま。

こうした幼い頃ずっと抱き続けた謎を、大人になり、沖縄米軍の親友を持った現在、当時の謎を少しでも理解した

いと思ひ、筆者武司に「老人とラジオ」の執筆をお願いした。これが発刊のきっかけである。

筆者武司は2020年2月に89歳で他界。武司の妻悦子は2024年4月に87歳で他界。二人とも一生を和歌山県伊都郡かつらぎ町で終えた。肺癌と狭心症など、“入院のデパート”みたいな父だったが、コロナ感染では無く、いわゆる「ポツクリ」。母は老衰、花が枯れていくように静かにこの世を去った。

筆者武司から教えてくれた最高の言葉は

「先ず健康」

「感謝」

父母に感謝。

2024年6月

編集者 西田 和生

※ 改訂新版の冒頭タイトルを「空襲警報」としましたが、「老人とラジオ」発刊のきっかけをお話ししたかったのです。空襲警報、警戒警報、防空情報と、当時の放送について詳しく知りたい方は、録音が「NHKアーカイブス」に保管されているようなので探してみてください。また、岩波新書「幻の声 NHK広島8月6日」白井久夫著に詳しい解説があります。編集者は、2015年と2016年に再放送されたNHKラジオ深夜便を録音した音声から引用しました。



目次

「空襲警報」	2
目次	6
改訂新版 はしがき	0
はじめに（初版）	1
著者が愛用したラジオ達	3
放送局型123号ラジオ受信機（戦時許容型）	4
ビクター 7TA-5 7石スーパートランジスタラジオ	6
東芝 かなりやQ 5球スーパー真空管ラジオ	8
東芝 IC-70 IC+FET+5石 FM/AMラジオ	9
昭和50年以降一人一台の時代へポケットラジオ	1
東芝 6TC-485 時計付トラベルラジオ	2
著者とその身近な人々	3
著者が聴いていた地域の電界強度地図（昭和24年）	5
一 紀の川のジャコとり	6

二	空襲警報	2
三	部屋片付け	3
五	太平洋戦争開戦日	3
六	改造ラジオ	3
七	終戦前後芋づくりの手伝い	3
八	終戦前後サツマイモ作り	4
九	終戦後の通学	4
一〇	四国まいり	4
十一	川止め	4
十二	怖い話	4
十三	台風(室戸台風)	5
十四	亥の子餅(いのこもち)	5
十五	戦時中のラジオ修理	5
十六	肺癌	5
十六の二	夜が怖い!??癒しのラジオ	5
十七	湧き水の棚田(沼田)米作り	6
十八	不便な場所の脱穀	6
十九	ド素人の牛使い	6
二十	終戦前後の食糧難	7

二十一	終戦の思い出(玉音放送)	73
二十一の二	ラジオのある風景〜終戦〜玉音放送〜(編集者筆)	75
■	「玉音放送」の予告	76
■	「玉音放送」の内容	77
二十二	土白で粃摺(もみすり)	80
二十三	田植えの準備	83
二十四	用水の番水制度	85
二十五	薪取り	87
二十六	足で揉む番茶	89
二十七	溜池の魚	92
二十八	紀の川 エビ抄い	94
二十九	水車で米搗(つき)	96
三十	大峯山登り	98
三十一	池のエビ採り	101
三十二	足踏み臼	103
三十三	ゴリ押し	105
三十四	杉の木の枝打	107
三十五	キウイフルーツの灌水(かんすい)	109
三十六	紀の川の増水(第二室戸台風)	111

三十七	子供から見た養蚕	1
三十八	夕方 川辺の酒盛	1
三十九	濁酒の花見	1
四十	溜池の土砂出し	1
四十一	麦餅	2
四十二	西国まいり槇尾山	2
四十三	同級会（最終。八十五才）	2
あとがき		8

改訂新版 はしがき

■本書は、筆者が書いた順番通りに掲載しています。「しおり」や「目次」を使って興味ある内容にジャンプしてください。

「RadioIbanのマニュアル全集」に本書を加えるに当たり、内容の加筆、写真画像の追加、再び本文の精査と編集を行いました。

- ・著者が愛用したラジオの写真画像を追加
- ・終戦後の電界強度地図(近畿地方)を追加
- ・著者とその身近な人々の写真を追加
- ・手書き原稿から、どうしても判別できない文字は、やむなく「●」としました

改訂新版から、時代考証と読みやすさを考慮して、縦書き(文庫本調)に変更しました。

PDF形式(B5縦116ページ)と、Kindle形式(116ページ)

※PDF形式とKindle形式は、写真画像の配置などレイアウトが異なります。

編集 西田 和生

発行 radioIban(ラジオ一番)

発行日 2024年6月20日

はじめに（初版）

「ラジオのある風景」シリーズ第1弾。

和歌山県の田舎町に暮らす老人が、ラジオとの、ほのかな付き合いを語りました。戦中戦後の時代を、ラジオと共に生きてきた物語があります。ラジオ受信機が社会の主役だった時代に、田舎で農業を営む著者が、ラジオと関わった人生を書いたものです。田舎生活の歳時記です。本人はラジオ技術者ではありません。筆者は昭和一行生まれです。お話は戦前、戦時中、戦後、そしてちよつと昔の昭和までの実際にあつた経験を、43のトピックに分けて書いています。

旧字体漢字など、現在では使われない漢字には、編集時にできる限り○内にふりがなを挿入しました。難解な方言（著者は和歌山県在住で紀州弁）にも簡単な解説を加えています。言い回しや言葉遣いについては、現在風に編集しすぎると、老人本が書いたオリジナリティを損ねると考え、原文のままにしています。読み辛い点はどうぞご容赦ください。

「老人とラジオ」は、radioIban.com “知的電子実験〜ラジオのある風景”記事に、大幅に加筆したものを電子書籍化したものです。

2018年12月吉日

著者 西田 武司
編集 西田 和生

原稿起こし・編集 宮本 恵梨菜

デザイン 嘉賀 幸子 (D-KAGA <https://d-kaga.com>)

発行 radio1ban(ラジオ1番)

WEBサイト <https://radio1ban.com>

著者が愛用したラジオ達

放送局型123号ラジオ受信機（戦時許容型）

筆者の自宅屋根裏から発掘された。ほとんど崩壊状態。



空襲警報を聴いていた放送局型123号ラジオ受信機

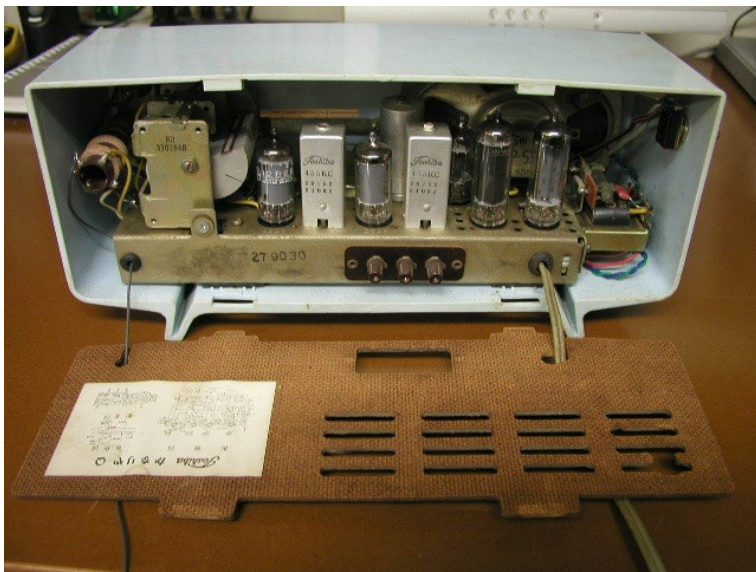
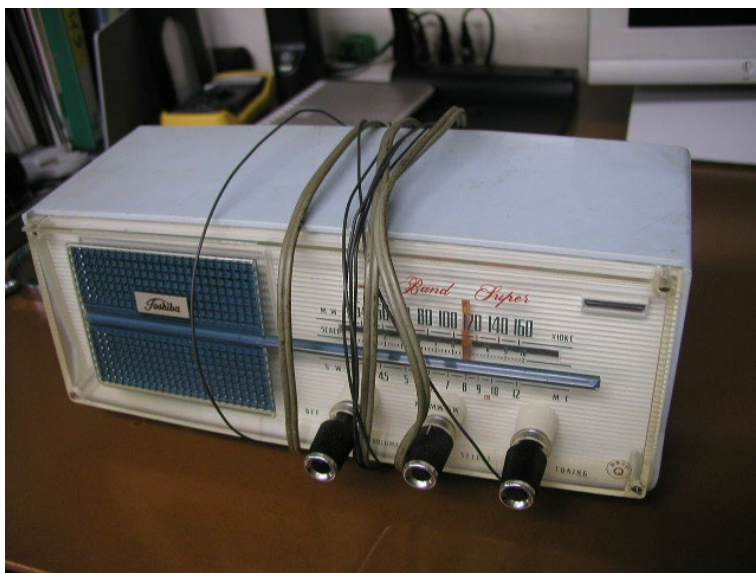


屋根裏から発見した放送局型123号ラジオ受信機

東芝 かなりやQ 5球スーパー真空管ラジオ

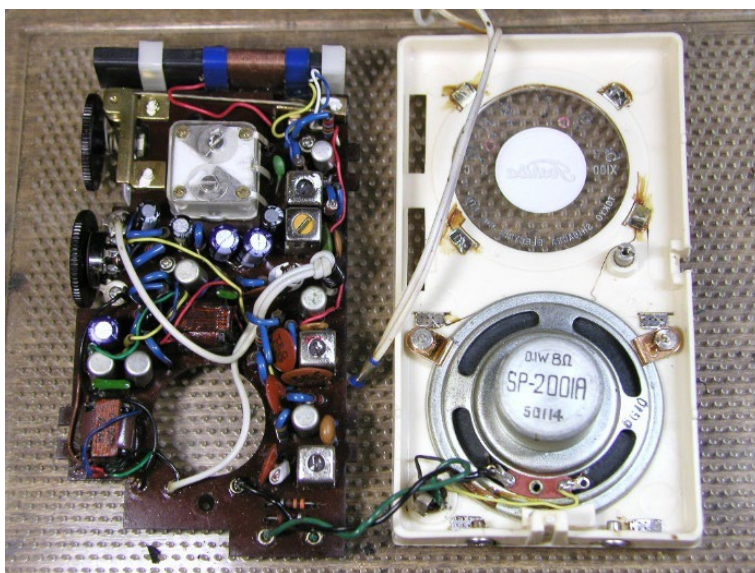
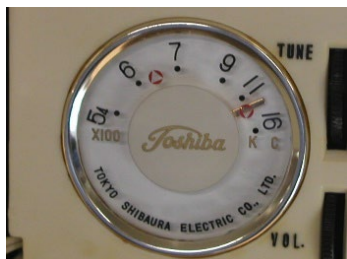
筆者の弟が大学時代に愛用した真空管ラジオ。実家に残して行ったこの“かなりやQ”は、結局、編集者がバラバラに分解してしまった。後に編集者の、真空管ラジオ整備の原点となる。

トランスレスラジオ 12BE6 12BA6 12AV6 30A5 35W4

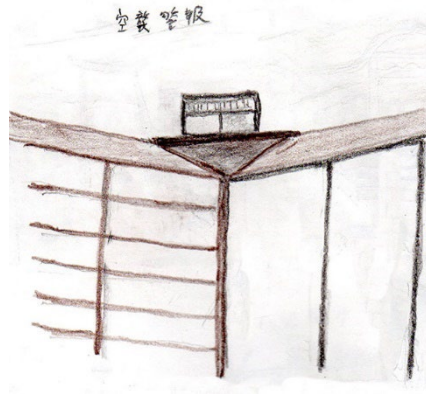


東芝 6TC-485 時計付トラベルラジオ

昭和38年。旅行好きな筆者の父が愛用したトランジスタラジオ。
旅のお供。普段は大事にタンスに仕舞い、決して畑仕事には持って行かなかった。孫である編集者にも触らせる事は一切無かった。
分解写真は、不良トランジスタ交換、電解コンデンサ交換後の様子



二 空襲警報

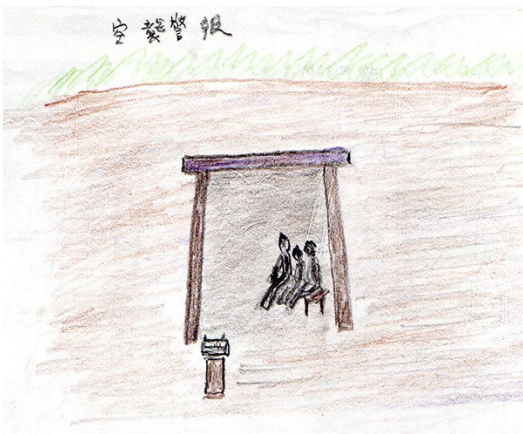


今日も夕方から警戒警報発令中で、家の中の電球は黒布で被われ、窓に黒いカーテンが引かれている。その内に一台のラジオは、隅の棚の上から空襲警報発令を知らせ、敵機B-29爆撃機の編隊が南方洋上より和歌山市方面に向かってる。

半分ほど開けて、家族は皆外へ出て防空壕へ入る。すると近所の人達も続いて入り、口々に焼夷弾がどうか、爆弾は道とか、想像で色々しゃべっている。

約半時間経った時親父が「お前等いっぺん出て来て西の空を見てみい！」と叫んだので、皆外へ出て見ると、真っ赤に赤く明るい空。相当大的な爆撃だった様だ。又それぞれの話で賑やかだ。ふと我に返ると空腹を感じている。誰も同じで「腹減ったなあ」と声が出た。

その頃は現在と違って「欲しがりません勝つまでは」と、農家でも米は勿



論、サツマイモ等、良いものは皆「供出」と云う名で国への買い上げ、家に残ったものは、手の親指みたいな小さい芋です。今日食べるものは、その芋の塩茹でしかない。

母親が竹籠に入れて縁床の上に置いて「さあ、これも」。それでも直ぐ無くなった。

今では誰も見向きもしない様なもの。五〇〜六〇年位前から想像も出来ない位の変わり方だ。社会生活その他、筆舌では現せない位の変わり様だ。私宅でも車が三台ある。よその国の話のようですが、満足して喜んでいる人ばかりではない。贅沢に慣れて、あれ欲しい、これ足らんと不足に思う。

これを思い出した機会に感謝してありがとう。日本万歳。ありがとうございます。

